

《日本研究所主催講演会 二〇二三年二月一日 講演要旨》

シーボルト来日二〇〇周年記念

## 賀来佐之と伊藤圭介——二人の門人——

松田 清

はじめに

本講演は本学附属図書館主催「シーボルト来日二〇〇周年記念 神田佐野文庫企画展 賀来佐之と伊藤圭介——二人の門人——」(二〇二三年二月一日〜二日)に際し、二月一日、同図書館で行った。講演内容は、司会の日本研究所長町田明広先生が二〇一四年二月に賀来佐之あてシーボルト書簡を発見されたのを契機に、故遠藤正治先生を中心に鳥井裕美子先生、加藤僖重先生と講演者の四名が行った二回の共同研究の成果(二〇一六・遠藤・鳥井・松田、二〇一七・遠藤・加藤・鳥井・松田)、鳥井先生の先駆的な賀来佐之研究(一九九七)をもとに、講演者の関連する研究成果を加えた。

本講演会場で配布した同タイトルの展示目録(松田清編、二〇二三年二月二日、神田外語大学附属図書館刊、本文二五頁)は展示構成に従って、第一部「忘れられた門人・賀来佐之——パネル展示——」の写真パネル一六点の解説、第二部「賀来佐之と伊藤圭介——神田佐野文庫資料から——」の展示資料一〇点および参考写真の解説を収載したが、本講演では、京都府立京都学・歴史館寄託山本読書室資料、孤野小学校所蔵孤野山採薬扁額、マンチエスター大学ジョン・ライランズ図書館所蔵資料の画像を加え、以下の八テーマからなるスライドショーを行った。

## 1 F.ノローニヤ『ジャワ植物図譜』(一七八六) — 成立と流伝 —

オランダ領東インドの植民地研究は一七七八年に設立された「バタヴィア学芸協会」の活動に始まる。最初の博物誌研究はスペイン人植物学者フランシスコ・ノローニヤ(一七四八―一七八七)によって行われた。神田佐野文庫所蔵の本図譜はノローニヤがジャワ島西部調査中(一七八六)に描いた植物図一〇五図、鳥図四図、由来不明植物図二五図からなる。宇田川榕菴(一七九八―一八四六)が文政元年(一八一八)六月、京都滞在中に、蘭学者辻蘭室(一七五六―一八三六)と協力して作成した写本である。伝存不明の元本(和紙、袋綴じ、鳥類を含む、蘭文解説付き)の図を榕庵が写し、蘭室が蘭文解説を転写し和訳している。

この写本のルーツはロンドン自然史博物館所蔵 *Nroulta Java Plants* に遡る。ノローニヤの支援者であったバタヴィア学芸協会会員ホーイマン (Jan Hooyman) への寄贈本をフランス人植物学者デシヤン (J. A. Deschamps) が入手したものであった。このホーイマン本から一七九二年と一七九六年の二回、中部ジャワ・スマラン海軍兵学校のために写本が作成された。ベルリン州立図書館所蔵本はそのいずれかの写本とされる。

一方、ノローニヤ自筆本(パリ自然史博物館蔵)は一七八八年一月モーリシヤス島で病死したノローニヤの遺産相続人となった島の農園主・フランス人植物学者シャルパンティエ・コシニー (Charpentier-Cossigny, 一七三〇―一八〇九) がパリの科学アカデミーに寄贈したものである。

講演者は二〇一九年五月末から六月初め、ロンドン本、パリ本、ベルリン本の書誌調査を実施し、神田佐野文庫本がロンドン本系統に属し、ベルリン本よりもロンドン本に近いことを確認した。神田佐野文庫本の元本の原本(洋紙、スペイン語かオランダ語の解説付き)が長崎に伝来した経緯には、出島在任中(一七七九―一七八三)小野蘭山・島田充房『花彙』のオランダ語訳を通詞に作らせ、ベンガル在任中(一七八五―一七九二)京都の医師荻野元凱から「台州園草木譜」を受贈し、シャルパンティエ・コシニーと交流したティツィング(一七四五―一八一二)が関与していたかもしれない。

神田佐野文庫本は宮中役人の内豎兼主幹・渡邊家に伝来した。紙帙に認められる書き判「五升庵」は蕉風俳諧を顕彰した京都の俳人蝶夢(一七三二―一七九六)の号として知られる。渡邊家の旧蔵者は、弘化二年(一八四五)六月二五日畑・医学院開催「異国草木会目録」にみえる「学圃堂 渡邊氏」すなわち四代渡邊珍香(一七五八―一八四八)が考えられる。

## 2 桂川甫賢筆「長崎屋宴会図」(一八二二)

— シーボルト来日以前の蘭学発展 —

日本橋の長崎屋は例年、將軍拝礼のため江戸にやってくるオランダ商館長一行の定宿であった。本図は將軍家侍医・蘭学者で画才のあった桂川甫賢(一七九七—一八四五)が一八二二年四月一八日に長崎屋の二階広間で開かれた仮装宴会の模様を描いたものである。下部に甫賢自筆の蘭文と署名がある。

[Den 27ste van Nigvats op malkander plaisieren in Hospes/Genijmonsche huis in Jedo — Ael822./Afgetekend door/W: Botanicus of Caneel Rivier junior.] (二月二七日江戸の旅館主人源右衛門宅における交遊の際一八二二年 W.ポタニクスまたは桂川ジュニア画)(朱文長方印・国竈)

本草学に通じていた甫賢は、商館長コック・ブロムホフの前任者ヘンドリック・ドウフ(一八〇三—一八一七在任)から蘭名 Wilhelmus Botanicus をもらい、この自画像にも Botanicus と書き入れた。Botanicus はラテン語で植物学者を意味する。ドウフの証言によれば、甫賢はオランダ領東インドの自然研究機関「バタヴィア学芸協会」(一七七八年創設)の初代会長・博物学者カール・レインワルトとオランダ語で文通。文政九年(一八二六)に同協会の通信会員となった。

また同年、江戸に滞在中のシーボルトに、小野蘭山・島田充房『花彙』(一七五九—一七六五)のオランダ語訳増訂自筆稿本(ルール・ポーフム大学東アジア学部所蔵シーボルト・コレクション)を献呈した。朱書きの「前書き」(Voorrede)によれば、商館長イサーク・ティツィング(一七七九—一七八〇、一七八一—一七八三在任)がオランダ通詞仲間に解説文のみを下訳させ、みづから校正したオランダ語訳は、第八巻が未訳。訳文に遺漏も目立つので、さらに訂正増記したという。

## 3 近代東洋学の草創とシーボルト編「日本植物目録」

一八世紀は欧州の植民地科学草創期にあたり、蘭英仏瑞の東インド会社や新田両キリスト教宣教師がその担い手となった。一八世紀後半にはオランダ領東インドにバタヴィア学芸協会(一七七八)、イギリス植民地のベンガルにアジア学会(一七八四)が設立された。

シーボルトは一八二三年、オランダ領東インド総督から日本の博物学的・民族的調査の特命を帯び、膨大な資金援助を得ていた。同時に、植民地支配の発展を背景とした欧州の博物館・園芸ブームに乗って成功を納めるべく、私的に日本コレクションを形成し、持ち帰った。

一八二〇年代欧州は植民地支配と連携した近代東洋学の草創期にあたり、一八二二年パリで東洋学会 (Société asiatique)、一八二四年ロンドンで王立アジア学会 (Royal Asiatic Society) が創立された。日本では蘭学の発展期にあたり、馬場佐十郎や桂川甫賢などのようにオランダ語を相当読み書きできる蘭学者が出現。蘭学はバタヴィア学芸協会を介して欧州の知的世界と繋がっていた。

尾張の本草学者水谷豊文の門人・伊藤圭介 (一八〇三—一八〇一) はシーボルトの要請を受け、文政一〇年 (一八二七) 九月までに出島のシーボルトへ腊葉標本を送付し、同月四日長崎到着から翌年三月帰郷するまで、シーボルトのもとで、豊後高田出身で帆足万里の門人賀来佐之とともに「日本植物目録」作成に従事。約一六〇〇種を記載した。圭介の帰郷後、シーボルトは佐之を頼りに、目録の漢名の充実を図った。

二〇一四年一二月に本学日本研究所長町田明広先生が若林正治コレクション (のちに神田佐野文庫の中核となる) を整理中に賀来佐之あてシーボルト書簡を発見された。この書簡は、佐之に目録ノートの完成を督促し、漢名の読みの解説書の所在を尋ね、目録完成前に帰郷しないよう要請する内容であること、佐之が文政一一年 (一八二八) 一月まで長崎に滞在したことから、同年一〇月頃に書かれたと推定される。

シーボルトは一八三〇年に帰欧後、ライデンでホフマン (J. Hoffman) を助手として「日本植物目録」の改訂稿 (ルー・ポーフム大学東アジア学部所蔵) を編集した。ホフマンはパリ『東洋学会誌』一八五二年一〇・十一月号に発表したH.スヒュルテスとの共著『日中植物名彙』の序文で、一八四一年末か翌年初め、シーボルトから「ある日本人学者」が作成した漢名解説資料の利用許可を得たことで、この共著の編纂を開始できたと述べている。『日中植物名彙』によつて伊藤圭介と水谷助六 (豊文) の名は欧州東洋学界に知られることになったが、シーボルトは賀来佐之の名をホフマンに秘したため、佐之の貢献と名譽は神田佐野文庫から発見されたシーボルト書簡によつて初めて、忘却から救われたのである。

#### 4 忘れられた門人・賀来佐之の生涯

島原藩医賀来佐之 (字公輔、号百花山荘、諡号毅篤先生、通称佐一郎、一七九八—一八五七) は豊後高田の医師賀来有軒の長男に生まれた。有軒は三浦梅園、小野蘭山の門人。佐之は一四歳から九年余り、日出藩儒・帆足万里の私塾で学び、異母弟、一七歳年下の飛霞 (陸三郎・陸之、一八一六—一八九四) を親代わりに訓導した。文政九年 (一八二六) 九

月、長崎留学。通詞吉雄権之助からオランダ語を学び、シーボルトに師事した。帰郷後、豊前・豊後で最初の蘭方医として名を成し、天保二年（一八三一）ウィルデノウ『植物学入門』の翻訳「本草新書」に着手した。

天保五年（一八三四）春、弟の陸三郎を連れて上京し、近江の仁正寺藩に滞留した。陸三郎は同年五月一六日の山本読書室物産会に出品し、同二三日、一九歳で山本読書室に入門。佐之も天保七年四月の読書室物産会に出品した。滞留五年で帰郷した佐之は師帆足万里の説に従い、漢蘭折衷に転じ、天保一三年三月、島原藩医に取り立てられ、翌年から藩の薬園主任を兼務。安政四年（一二月一八日、島原で病死した。

『雷雨書屋所蔵「医家肖像集」』（武田科学振興財団、二〇〇八）掲載の賀来佐之の肖像は紋付き袴の武家姿に描かれており、昭和初期の模写であるが、原図は明治末・大正初期の贈位運動時に制作されたものであろう。

賀来佐之の履歴草稿（賀来飛霞筆、明治一四年）によれば、長崎遊学以来の「同窓莫逆ノ友」伊藤圭介は安政五年（五月）、伊勢孤野山採薬の帰途、桑名で島原藩主の滞在に遭遇。佐之の動静を人に尋ねさせたところ「其既二即世セシヲ聞「キ」懐然、悽愴、最深カリシ」という。孤野山採薬記念の扁額（孤野小学校蔵）に書かれた圭介の五律「孤瑩山采薬」

は圭介の漢学の素養をうかがわせる。

シーボルトが画才のある一三歳の賀来陸三郎（飛霞）に宛てた手紙を兄の佐之が訳した「シーボルト礼状」（大分県立歴史博物館寄託）が伝わる。一八二八年九月五日付のこの書状でシーボルトは「毎度、腊葉と写生図の御恵投にあずかっております。大いに御苦労のほど浅からず、かたじけなく存じ上げます」と謝意を示し、学問精進の「お慰みのため、箱入りの指輪を進呈」した。「今後もお見捨てなく、召使い同様にお願いできれば、本懐に思うこと間違いありません」という一三歳の少年に対する懇懇な言辞はシーボルトの人間性を伝えている。

賀来飛霞の画才は、弘化四年（一八四七）年四月、山本亡羊古稀の祝いに贈った松毯図、明治一二年頃合作の本草綱目草木小画集のミズヒキ図など、山本読書室資料（京都府立京都学・歴史館寄託）に伝わる絵画からもうかがえる。

## 5 シーボルト編「日本植物目録」写本の系統

シーボルトは日本における自然誌研究の支援者・オランダ通詞茂伝之進に、「日本植物目録」写本（伝存せず）を贈呈した。その一八二八年六月一八日（文政一一年五月七日）付序文（圭介の転写）で、目録作成の「有益な助手」となった

伊藤圭介の「貢献は特大である」と強調しているが、賀来佐一郎は名のみで、目録作成への貢献は触れられていない。江戸で天文方高橋景保が逮捕された文政一一年一〇月一〇日、佐之は長崎から名古屋の圭介宛てに「日本植物目録」（神田佐野文庫本）を発送した。圭介が『泰西本草名疏』（翌年一〇月刊）準備のため、稿本の校訂を佐之に依頼するとともに、「日本植物目録」の善良本を懇願してきたために、長崎で詠えて送付した写本であった。

シーボルトは翌一二年一月、出島に拘留され、一二月九日（一八三〇年一月三日）に離日し、パタフィアに向かった。天保二年、佐之は架蔵の「日本植物目録」写本を他人に貸して失った。そのため圭介は先年受け取った写本（神田佐野文庫本）を同年五月一三日（一八三二年六月二日）付で佐之に贈呈した。佐之はその中に、かつてシーボルトから受け取った問題の督促状を挿入した。その末尾には「貴殿のことは決して忘れません。（…）命のある限り、立派で忠実な教え子たちのことを思い、オランダの地から、学問に対する彼らの情熱を促進するようにします。永遠に貴殿の誠実な師、一八二八年 フォン・シーボルト。深い友情からのお願いです。私の仕事を終える前に出発しないように」とある。

ボーム・ルール大学蔵「日本植物目録」改訂稿（一八四一年頃成）はシーボルト筆学名と佐之筆和名カナ書きからな

る有野A紙とホフマン筆漢名・和名カナ書き及び植物記載略号からなる無野B紙を交互に重ねた構造となっている。A紙はシーボルトが佐之あて督促状で完成を急がせた目録ノートであり、ホフマン筆B紙は、ホフマンがシーボルトから利用を許された「ある日本人学者」（すなわち賀来佐之）の漢名解説資料を転写したものである。

## 6 賀来佐之の蘭学知識―訳書『本草新書』にみる―

賀来佐之は天保二年（一八三一）五月二三日付伊藤圭介あて書状で、ウイルデノウ『植物学入門』蘭訳（一八一八―一九）三冊入手を、翌年正月にはその翻訳着手を知らせ、同六年（八三五）八月末頃までに翻訳を進めたいらしい。ウイルデノウ (K. L. Willdenow, 一七六五―一八一二) はリンネ植物学を発展させ、植物地理学、植物生理学の成立に貢献したベルリンの植物学者。伝統的な本草学知識を援用した佐之の苦心の翻訳『本草新書』（存七冊、日出町歴史資料館・帆足萬里記念館蔵）は誤訳が散見されるものの、総じてオランダ語読解力の高さを示している。

第V章「植物生理学 (Physiologie)」の章題を佐之は「植物解剖篇」と訳した。Physiologieは一八世紀科学における systema のように一九世紀科学を象徴するキーワードであつ

たが、佐之の訳語「解剖」は新しいキーワード理解の困難さを示している。一方、systema (体系、分類体系) のオランダ語 stelsel に対する訳語「序次」、maaksel (構造) の訳語「造質」は苦心の成果といえる。次の訳文は佐之のオランダ語力をよく示している。( ) 内に現代語訳と原語を補った。

植物の序次 (↓体系的分類 stelsel) は之を花及其内面の造質 (↓構造 maaksel) に従つて之を為は固より本草家 (↓植物学者 Plantkundigen) の事業に属す。外形を観察するは唯序次のなし易を助るのみ。外形を観察するは本草家の棄て講せざるべからざるもの也 (↓決してこれだけに依拠してはならない een Plantkundige moet zich op dezelve nooit alleen verlaten)。

#### 7 伊藤圭介の蘭学知識—幕末尾張蘭学の指導者—

シーボルトはオランダ語作文能力のある門人に、日本の物産や医学に関するオランダ語レポートを課した。伊藤圭介は文政一〇年(一八二七)年九月四日に長崎に到着し、翌日からオランダ商館で、シーボルト、賀来佐之、岡研介とともに「日本植物目録」の編纂を開始した。長崎ではこの事業のため多忙であったはず。圭介のレポート「勾玉考」の執筆と提出は、翌年春、名古屋に帰郷後のことであろう。門人のオラ

ンダ語リポートは、他に「紀州産鯨について」(岡研介)、「日本古代史考」(美馬順三)、「日本における茶樹の栽培と茶の製法」(高野長英)、「日本疾病志」(高良斎)、「灸法略説」(石坂宗哲)などが伝わる。

神田佐野文庫の伊藤圭介旧蔵「薬名アベセ引・コンストウォールド」は原書講読を重視した坪井信道塾の学風を伝える薬名・術語集。幕末蘭学塾で広く流布した。前半「薬名アベセ」のオランダ語タイトルは「羅蘭漢和薬名集 坪井塾生編 宇田川榛斎等校閱 於江戸 天保五年」の意。後半「コンストウォールド」のオランダ語タイトルは「医薬関係術語集 三尾謙造編・緒方三平「洪庵」改訂増補 アルファベット配列 於江戸 天保五年」の意。

伊藤圭介は幕末尾張藩において海防・砲術知識の普及をはかるため、オランダ語の教科書を「花繞書屋蔵版」として編集出版するとともに、国学者・砲術家の上田帯刀(仲敏)と協力して尾張洋学館を創立(安政六年・一八五九)した。神田佐野文庫の伊藤圭介著『万宝叢書洋字篇』(天保二一年・一八四一、花繞書屋蔵版)は著者所蔵本で、後見返しに後見返しに「不出門蘭／尾張洋学館蔵書／嚴禁貸売」印(朱文方印)がある。また、同じく花繞書屋蔵版『輿地紀略』(安政五年春刊)はオランダの青少年用世界地理教本をオランダ語教科書として復刻したものである。



## 8 シーボルト旧蔵『物品識名』の謎

講演者は二〇一九年五月二四日、マンチェスター大学ジョン・ライランズ図書館 (Joh Rylands Library) において、シーボルト旧蔵の水谷豊文(助六)著『物品識名』(一八〇九)・同拾遺(一八二五)を調査した。P. F. コーニツキー編『リンゼー文庫和書目録』(P. F. Kornicki, "The Japanese Collection in the Bibliotheca Lindesiana." Bulletin John Rylands Library. 1993) が仮題「物品識名貼込帖」を与えている資料番号 Jap 209 である。

総皮装丁の洋本二冊に仕立てられ、背表紙は「BUTS BIN SIKI MEI / SIVE / NOMENCLATURA / RERUM NATURALIUM / AUCTORE / M. F. SUKEROK I [-II]」の金文字を印刷する。この背表紙の装丁は都立大学牧野標本館所蔵シーボルト標本箱の背表紙と近似している。

両冊各葉の右ページは、原本を解本し袋綴じを延ばした各丁が、前小口を天にして貼り付けられている。左ページには「JAPONICE」(日本語)・すなわち和名欄)・「SINICE」(中国語)・すなわち漢名欄)・「NOMEN SYSTEMATICUM」(学名欄)の三欄からなる木版罫紙を貼り付け、「JAPONICE」の「NOMEN SYSTEMATICUM」の二欄には随所に

それぞれ、ペン書きのローマ字和名、二名法のラテン語学名が欧人の手で書き入れられている。「JAPONICE」欄の和名に付けられた伊藤圭介標本を示す記号「K」は第一冊(物品識名)に三三九、第二冊(物品識名拾遺)に六二、計四〇一箇所に及ぶ。

右ページに貼り付けられた原本は水石草木蟲鱗介禽獸のイロハ引き和名(カナ書き)・漢名対訳辞典をなしているが、全ての漢名に音読みのカナ書きが日本人の朱書で加えられている。漢名に対応する和名を補足する墨書も随所に見られる。

コーニツキー編前掲の目録に全く記載されていないのは不思議であるが、右ページの原本各丁の上部余白には、各物品に対応する小スケッチがほぼ全丁にわたって書き込まれている。小図は誰が、何のために、いつ描いたのか。

この謎について、講演者は賀来佐之の弟で、少時より画才を発揮した賀来睦三郎(飛霞)がシーボルトのために、その最初の滞日中に描いたものではないか、との仮説を立てている。睦三郎が佐之を介してシーボルトへ写生を贈り続けたことは、先にみた佐之訳「シーボルト礼状」(一八二八年九月五日付)で明らかである。

ここで問題になるのが、リンゼー卿が本書を入手した経緯に関する P. F. コーニツキー(一九九三)の報告である。そ



れによれば、シーボルトが死去した翌年一八六七年、將軍慶喜の名代としてパリ万博に派遣された徳川昭武の通訳として、そのロンドン留学に随行してきた、シーボルトの子アレクサンダーは、父親の蔵書の売却を図った。一八六八年五月、ロンドンの古書店主クウォリッチ (B. Quaritch) が和書コレクターのリンゼー卿 (Lord Lindsay) に宛てた売り込みの書簡には、「シーボルトの息子アレクサンダーがシーボルト・コレクションの和書を British Museum に売り込み交渉中ですが、 manuscript of botanical taxonomies と韓国語彙集だけは特別に貴重なので別に取り置いています。購入し

ませんか。この二点は父親が二回目の日本滞在中（一八五九～六二）に入手したものとことです」とあり、この manuscript of botanical taxonomies がリンゼー卿文庫のシーボルト旧蔵『物品識名』に該当するという。そうだとすれば、シーボルトの入手には二度目の日本滞在中に再会した伊藤圭介が関与した可能性が高い。

本資料の成立史については、今後さらに調査検討を続け、結論を得たい。本講演で、賀来佐之、飛霞兄弟を利用したシーボルトの人間性の一端を紹介できたものと思う。